ざいちのち 55
実践型地域研究ニューズレター no.55，2013年5月

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。

京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

守山フィールドステーション

地域再生の「知」のエネルギー

京都大学東南アジア研究所　安藤和雄

このたび､守山市美崎自治会は『みさき百科』を刊行した。その刊行にあたり、「知」のエネルギーについて考えた。

世は無常である。好むと、好まざるとかかわらず、社会は変化しつづける。約2500年前に釈迦はそれを悟りとして説いた。農村開発や農村発展、地域再生や活性化とは、この無常な世、自分たちが暮らす社会を意識的に変えていくことだと私は考えている。したがって重要となるのが、誰の、何のために社会をある方向に向けて変化させようとするのだ、ということになる。

日本の地域振興においては建前としての住民参加が徹底しているので、このことはあまり議論されることがなかったのだが、バングラデシュ、インド、ミャンマー、タイなどのアジア諸国やアフリカ諸国では、農村開発が国際援助、つまり、政府やNGOなどによるトップ・ダウンのプロジェクトで実施されていることが多い。そして、残念ながら1980年代にはいると、それまでプロジェクトはプロジェクト実施期間にはうまくいくが、その後は、活動が持続されていない、とか、貧しい人々はプロジェクト恩恵を受けているのか、という問題が明らかとなった。誰のためのプロジェクトなのか？誰がどんな情報にもとづきプロジェクト計画を作ったか、ということが盛んに議論されるようになった。そこから、プロジェクト計画作成のための調査、作成、運営は住民参加で行うべきであり、それも住民の主体的参加によらなければならないというように、国際援助の世界では議論がすすみ、それは今では農村開発関係者にとっては「常識」になりつつある（チェンバース　2011）。

一方日本においても、農村の都市なみの発展を目的に農村開発や地域振興政策が住民参加で実施されてきたにもかかわらず、農村部、特に中間山地農村での過疎化、高齢化の状況は加速されるばかりだった。そのような状況下で、当事者的な反省がおき、都市に目を向けるよりも、自分たちの住んでいる農村の良さを積極的に評価し、そこに暮らしてきたことに誇りを持とう、楽しく生きようということが2000年前後から議論されるようになり、地元学が提唱されるようになった。農村に暮らす当事者性を自覚したアプローチである（結城　2009）。

私自身も1980年代後半から1990年代前半にかけて国際協力事業団のバングラデシュの農村開発援助プログラムに長期・短期派遣専門家としてかかわり、そこで、在地化による農村開発というアプローチを提唱した。在地の技術、在地の知恵を学び、下絵と無関係に新しい事業という修正を乾いた絵の上に塗り付ける油絵的展開方法ではなく、水彩画的に下絵に馴染ませる、つまり、村にある技術や知恵を学ぶことでそれを土台とし、それに親和性をもたせる開発事業の展開方法である。馴染むという作業は村人の主体性が可能にするプロセス（事業の在地化）ということになる。

国内外の農村開発アプローチに明らかなように、村に暮らし、開発に対する主体的な活動を行うためには、知的エネルギーが不可欠である。それは外来の理論や知識ではない。村で暮らし、村の歴史や出来事、経験を知として認め、しっかりと記録し、伝承していくことにある。その作業によって、ますます村に暮らす意義が自覚されることになることだろう。

これまでの「地誌」は、地方自治体による村誌や町誌、市誌、自治会が音頭をとった集落誌のようなものだった。こうした「地誌」と「みさき百科」が異なるのは、前者は教育委員会や大学の教員が中心を担うことが多く「完成」が目指されるが、「みさき百科」は、まさに美崎のみなさん自らが美崎に継承されてきた記録や経験、知恵などを収集し、発表し「知識」として形を与えていくこと、「百科」として不完全であることが重要なのである。不完全であるから、継続しつつ、「完全」を目指していく作業なのである。その作業が美崎に暮らすことの意義をみなさん自身に考えさせ、新たな意義を発見していく契機となっていくことだろう。「完全」に到達してしまうことに意味はない。そこに歩んでいくことが重要なのである。

「地誌」は一度刊行されればそれで終わりだが、「みさき百科」はインターネットの百科事典であるウィキペディアのように、美崎のみなさんの主体的参加によって調査が行われ、それが新しく集積されていく。この作業が美崎の「新しい祭り」となって定着していき、地域再生のエネルギーの源として、美崎の社会変革のプラットホーム的な機能が発揮されることだろう。日本やアジア世界に発信する美崎地域再生モデルの一つの柱として「みさき百科」が成長していくことを願っている。

（以上、『みさき百科』より改変して転載）

ロバート・チェンバース　2011　『開発調査手法の革命と再生―貧しい人々のリアリティを求めて続けて―』（野田直人　監訳）明石書店：335ページ。
結城登美雄　2011（2009）『地元学からの出発―この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける―』（シリーズ　地域の再生　1）農文協：309ページ。

「下切による採種法」
－ひとつの在地の知を受け継ぐ－その４

朽木 FS　黒田末寿

開花期が早まるのか？

『百姓伝記』（以後『伝記』）では、採種用カブは植え替えないと種があまりとれず、しかもよい種にならないとある。しかし、肝心の「よほどかぶをきりすて」と下切を推奨する理由は見あたらない。では、「旧暦の２月の末に花さく」は、下切が開花期を早める可能性を示しているのだろうか。これは新暦ではほぼ３月末に当たり、余呉の中河内にはまだ雪が残っている時期で、菜の花類（*rapa* 種）[1] はまだ堅いつぼみでしかない。といっても、余呉南部の陽当たりがよいところではちらほら菜の花が咲く時期なので、この記述で開花期が早まることが示されているというのは無理がある。一方、結実期を「寒地では旧暦４月末から５月にかけて実が出来る」というのは、とくに早くないように思われる。もし、『伝記』に他の *rapa* 種の野菜の開花期が書いてあれば明瞭にできるのだが、そうは問屋が卸さず、何の記述もない。他の農書で開花期データを探すか、「試して知る」しかない。

『伝記』では、大根（237-242 頁）については種取法の記述がないが、これはやってなかった証拠にはならない。というのも『伝記』の記述は項目によってまちまちなところが多く、それゆえ未完成稿と推定されているぐらいだからである。大根ではいくつかの名産地をあげ、そこの種を取り寄せて他の地域で栽培すると２、３年はよくできるが、それ以降は品質が悪くなると書いている。カブも「特性は変わりやすいので、本来の性質のものをよく見覚えて選び種取しなさい」として、「心がけの第一は種選びにある」と強調している。綿の作り方では、5、60 年のうちに各地方によい品種が出来たと述べているから、17 世紀には個体選抜による品種改良が一般化していたとわかる。また、前の号にあるように、同じカブでも種のついていた部位やとり方によって成長具合やスの入る時期が違うという指摘は大変興味深い。私たちもぜひ、試してみたい。

写真：
（上）左端は、10 月 18 日に採り半分を下切、３週間陰干しした山カブラ。右二つは 11 月 9 日に採り 11 日に半分を下切したもの。
（下）みな 11 日に植えた。細根が皮から生えてくる。葉柄のトゲは山カブラの特徴。

自家不和合性打破の可能性

近年、自家不和合性の遺伝子レベルでの研究が進んでいるが、その打破のメカニズムはそれほど分かっていないままである。少々飛躍するが、下切で繁殖成長の強化がありうるのなら、別の可能性として、自家不和合性の低下も含めて相手かまわず受粉する能力が強化されることも考えられる。この場合は、同一品種のカブがかたまって生えていれば他品種との交雑の確率が極めて低くなる。下切しないで隔離した個体と下切して隔離した個体を比較すれば、この検証もできるだろう。

下切選定の結果

下切の意味に気づき始めてすでに半年以上たった。昨春、丸ないし平丸型で中まで赤味が強く柔らかい山カブラを庭に４個植え、うち一個体から何とか種が取れて焼畑の一画に植えた。その結果はどうだったか。

発芽が悪く収穫したのは結局９個体。まず形は、すべて丸といってよかった。収穫していない小さいものも丸形だったから、丸型は簡単に選抜できそうである。野間直彦さんが選抜した種でも丸形は割合簡単に固定しそうということである。10 月 18 日に大きくなっていたものは、育ちの速さと早取りのせいか柔らかくて中は山カブラと思えないほど白く、味見すると淡いほろ苦さがあって大変美味しかった。11 月に取った残り８個体は、中の赤味はまちまちだが堅さの問題はなかった。これが分かるのも下切の威力である。３週間乾した中白の個体と柔らかい２個体を選び、種取用に植えた。下切後の乾燥の違いが開花に影響する可能性の検証を楽しみつつ、余呉の人たちに喜んでもらえるカブラの復元をめざす。

[1]：カブはアブラナ属（Brassica）rapa 種の変種。同種にはミズナ、アブラナ、コマツナ、ハクサイなど数多くの野菜が変種として含まれている。いずれも自家不和合性があり、変種間で交雑しやすい。

筏がつなぐまち
～保津川筏復活プロジェクトの意義を考える⑧

大阪商業大学経済学部　原田禎夫

1990 年代ごろから、全国各地の河原や海辺ではごみの大量漂着が深刻化するようになった。こうしたごみの多くは、食品や飲料の容器・包装品を中心としたプラスチック製の生活ごみであり、景観の悪化だけではなく、生態系への影響も懸念されている。特に、1997 年からはそれまで業界団体による自主規制が行われていた 500mL の飲料用ペットボトルの使用が解禁され、それ以降、各地で大量にペットボトルが漂着して大きな問題となっている。また、生活様式の変化とともに、スーパーやコンビニエンスストアが地方部にも浸透し、たとえばレジ袋なども大量に漂着するようになった。さらに、農村の高齢化を背景に、農業の省力化・低コスト化をめざして、マルチシートなどのプラスチック製農業資材が大量に使用されるようになったのもこの頃からである。

そうした中、この保津川でもいわゆる「漂着ごみ問題」が深刻化する。当初は、有志の船頭衆による清掃活動がボランティアとして行われていたが、大雨のたびに繰り返し漂着する大量のごみに、もはや船頭衆だけの取り組みでは対処しきれない事態となりつつあった。

そうした中で迎えたのが、保津川下り開航 400 周年にあたる 2006 年であった。京都の豪商である角倉了以が 1606 年（慶長 11 年）に保津峡を開削して始まった保津川下りの 400 周年を祝おう、と船頭の豊田知八氏を委員長とする「400 年記念準備委員会」が 2005 年に立ち上げられた。この委員会の呼びかけに呼応する形で、亀岡市観光協会・保津川遊船企業組合・亀岡青年会議所・亀岡市そして市民公募委員を中心に行政や市民が広く参画する「保津川開削 400 周年記念事業実施委員会」が設立されて、多数の市民が参加する清掃活動や水運文化の伝承をめざしたさまざまな活動が展開されたのは、以前に述べた通りである。

この委員会の活動の特筆すべき点は、それまで保津川をめぐるさまざまな取り組みではみられなかった、行政・事業者・市民が一同に会するプラットフォームの創設にあったといえる。図 1 に示すように、この委員会は 3 つの部会から構成されており、それぞれに特徴のある取り組みが、3 者の対等なパートナーシップのもとで行われた。その後、環境面の活動は NPO 法人プロジェクト保津川が、歴史・文化面の活動は「保津川の世界遺産登録をめざす会」が継承することとなるが、現在に続く保津川における行政と市民協働の形は、この頃にその素地が作られたといえよう。

次回は、保津川開削 400 年記念事業から筏復活プロジェクトへと続く取り組みの意義を、特に保津川を取り巻く行政計画と市民参加の観点から考察する。

写真：保津川開削 400 年記念事業のひとつ、亀岡市内の南郷公園に保津川下りの舟を浮かべて設えられた特設舞台で行われた「了以にであう夢開削・水の庵」。現役の保津川下り船頭でもある豊田知八氏と、角倉了以役に扮した地元保津町選出の西口純生亀岡市議が、保津川開削の歴史について語り合った。（写真提供：豊田知八氏）

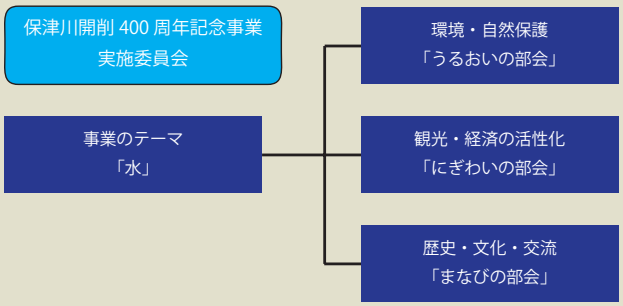

図 1：保津川開削 400 周年記念事業実施委員会の構成

催しのご案内

■京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業　第 56 回　実践型地域研究　定例研究会

日時　2013 年 5 月 30 日（金）　17：00 ～ 19：00
場所　京都大学東南アジア研究所稲盛記念館２階東南亭
発表者　原田禎夫　大阪商業大学経済学部 経済学科 / プロジェクト保津川副代表理事

内容　「韓国における流域管理政策と河川ごみ～最上川・保津川との比較から考える」

研究会終了後に懇親会を行います。

★以上の催し物へのお問い合わせは下記までお願いします。
京都大学　東南アジア研究所　実践型地域研究推進室
担当：安藤和雄（ando@cseas.kyoto-u.ac.jp）まで。

バケツ一杯の湯で幸せな気分
～バングラデシュ・タンガイルで～

おおり医院勤務　東南アジア研究所特任研究員
分部 敏

朝 6 時に湯の配給がありました。前日からバングラデシュの都市タンガイル[注1]の SSS レストハウス[注2]に宿泊していました。ボーイが熱い湯を持って来て、シャワー室のバケツに入れてくれました[注3]。それを水で薄めて適温にすると、ちょうど大きなバケツ一杯の、ほど良い熱さの湯となりました。これで朝のシャワータイムの準備は完了です。

11 月のバングラデシュの朝は肌寒いのですが[注4]、シャワー室は湯気でほどよく暖まりました。このバケツの湯を手桶で汲んで、体にかけながら洗います[注5]。石けんとシャンプーで体と髪をこすり、それを洗い流しているうちに、体も温まり幸せな気分になりました。

ちょうどバケツ一杯の湯で、一通りのことが済みました。

災害や紛争の時の人道援助の対応基準を記したスフィア・ハンドブック[注6]という本があります。スフィア・プロジェクト[注7]が編纂したもので、最新版（2011 年版）の日本語訳があります。その中に給水の項目[注8]があります。それには、基本的な水のニーズの総計は、1 日当たり人ひとりで 7.5 ～ 15 リットルと示されています。

写真 1：湯を入れるバケツ

図：バングラデシュ国（赤で示す地域）

私は大学時代に山岳部で山登りをしていました。大きなキスリング・ザックには 5 ℓ のポリタン（ポリエチレン・タンク）を入れ、水場の無い幕営地（テント・サイト）まで、水を満タンにして担ぎあげました。水 5 ℓ は 5kg あり、重い思いをしました。山岳部に入部した時に、上級生から「ポリタンは 5 ℓ のものを買うように、ちょうど 1 日分の水がこれで足りる」と言われたことを、今でも覚えています。3 年間山登りを続けて、毎回その言葉を思い出していたからでしょう。冬山では、コンロで雪を融かして水を作ります。水は使った燃料と引き替えの貴重なものです。テントを張り、転がり込むように入ると、すぐに水作りを始めます。各自の 5 ℓ のポリタンにいっぱいになる量の水を作ります。ちょうど 1 日分の調理と飲料に必要な水の量です。

日本でも飲料水を買う時代になっています。50 年前は想像もしなかったことです。今あらためて水のことを考えてみたいと思います。

注
1. タンガイル Tangail は、バングラデシュ国の首都ダッカ Dhaka の北西約 150㎞にある都市。
2. SSS レストハウスには、2011 年 11 月 14 日から 16 日にかけて宿泊した。
3. バケツの容量は測っていないが、25 ～ 30 リットル程度のものだった思う。
4. バングラデシュでは 11 月から乾季が始まり、ダッカの 11 月中旬の最低気温は 18℃ 程度で、東京の 9 月下旬の最低気温に相当する。
5. シャワールームに手桶が無かったので、声をかけて持ってきてもらった。
6. スフィア・ハンドブック 日本語版 3 版 , 2011 年 , スフィア・プロジェクト The Sphere Project －人道憲章と人道対応に関する最低基準 Humanitarian Charter and Minimum Standards in Humanitarian Response, 特定非営利活動法人 難民支援協会 , 東京
7. スフィア・プロジェクトは、NGO のグループと赤十字・赤新月社運動によって、人道援助の主要分野全般に関する最低基準＝スフィア・ハンドブック＝を定める目的で 1997 年に開始された。ハンドブックの目的は、災害や紛争における人道援助の質、および被災者への人道援助システムの説明責任を向上させることである。「人道憲章と人道対応に関する最低基準」は、多くの人々と援助機関の経験に基づき作成されたものである。よって、特定の援助機関の見解のみを示したものではない。（スフィア・ハンドブックの前付（ii）より）
8. スフィア・ハンドブック P89, 3.　給水

発行：〒 606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集 : 安藤和雄・鈴木玲治・大西信弘・小野寺佑紀